

●出題意図・解答例

■令和 8 年度 仁愛大学大学院 入学試験問題（一次募集）

【心理学】 I

【出題意図】

近年の臨床心理学において重要な概念・トピックに関して、十分な知識および論述する能力があるかを問う問題である。

問 1

評価の基準

- (1) 主題理解と論理の明確さ：自傷行為への対応を倫理的観点からの確に捉えているか
- (2) 論理的構成と段落展開：論理的に展開され、導入・展開・結論が明確か
- (3) 専門的知識の活用：守秘義務・インフォームドコンセント・倫理原則・Safety plan・法制度への言及があるか
- (4) 具体例・実践的視点の活用：多職種連携・家族対応・精神科紹介など実践的対応が具体的に示されているか
- (5) 思考の深さ・倫理的ジレンマの整理：守秘義務と安全確保の葛藤を明示し、判断の根拠を論理的に展開しているか
- (6) 表現力・文章の完成度：論述内容全体について、表現の適切さ、論の整合性があるか

問 2

評価の基準

- (1) 科学者としての視点を論じているか
 - ・エビデンスに基づいたアプローチが必要であること
 - ・臨床心理学における新しい研究動向を把握していること
 - ・心理療法中の臨床的判断を経験則や直感のみに頼らないこと
 - ・批判的思考を持ち、既存の心理療法の限界性を理解していることなどを十分な文字量で記述できていること
- (2) 実践家としての視点を論じているか
 - ・クライアントの個別性を尊重し、臨床心理学の知識を柔軟に調整して伝えること
 - ・臨床心理学的な科学的知見はあくまで一般的傾向を示すこと
 - ・臨床心理学の理論にない現象や課題から新たな仮説を生み出すことなどを十分な文字量で記述できていること
- (3) 具体例の記述を行っているか

- ・特定の心理療法に縛られず、最新の研究に基づいた実践と、臨床経験から得られた知見を研究に還元するような臨床と研究の往還サイクルを説明できていること
- ・クライアントの一人一人に合わせた方法をエビデンスに基づいて提案できること
- ・従来の理論では説明できない新しいクライアントの反応パターンに気づき、その臨床的知見を基に新たな仮説を立て事例研究を実施すること
などの例を十分な文字量で記述できていること

(4)以下は減点対象となる

- ・一方のみを支持する場合
- ・誤字脱字がある場合

【心理学】Ⅱ

【出題意図】

心理学に関連する広範な領域から、重要かつ基本的な用語の知識があるかを問う問題である。

① スペリー (Sperry,R.W.)

スペリーはアメリカの神経心理学者で、大脳半球の機能的特異性(左右差)を解明した研究で知られる。重度てんかん患者の脳梁切断術後の行動を分析し、左半球は言語・分析、右半球は空間認知・音楽などに優位性を持つことを示した。この研究により1981年ノーベル生理学・医学賞を受賞し、脳機能局在の理解を大きく進めた。

参考

宮下保司(監修)(2022)カンデル神経科学 第2版 メディカル・サイエンス・インターナショナル p.22

② 転移と逆転移

転移とは、クライアントが過去の重要な他者との関係で形成された感情や期待、対人パターンを無意識に治療者へ向けて再現する現象である。愛情・怒り・依存などが典型で、治療関係に影響を及ぼす。一方、逆転移は治療者がクライアントに対して抱く感情や反応のうち、治療者自身の無意識的体験に由来するものである。両者を適切に理解・検討することは、治療関係の調整やクライアント理解を深める上で重要な臨床素材となる。

参考

下中直人 (2003) 心理学事典 平凡社 pp. 493,608

③ 半側空間無視

半側空間無視とは、脳損傷により身体や空間の一侧（多くは左側）に注意を向けられなくなる症状である。視力自体は保たれているにもかかわらず、反対側の刺激を認識・探索できず、食事で皿の片側だけを食べる、文字を片側だけ読むなどの行動がみられる。原因として右半球の頭頂葉・側頭葉・前頭葉の損傷が典型である。注意の偏りが中心的障害とされ、リハビリでは視覚探索訓練やプリズム適応などが用いられる。

参考

宮下保司 (監修) (2022) カンデル神経科学 第2版 メディカル・サイエンス・インターナショナル p.519

④ HDS-R

HDS-R (長谷川式認知症スケール) は、日本で開発された認知症スクリーニング検査で、主に高齢者の認知機能低下を把握する目的で用いられる。見当識、記憶、計算、言語流暢性など9項目から構成され、合計30点満点で評価される。短時間で実施でき、医療・介護・地域支援の場で広く普及している。診断を確定する検査ではなく、認知症の可能性を早期に捉えるための指標として、MMSEなど他の評価と併用されることが多い。

参考

氏原 寛ほか (2012) 心理臨床大辞典 培風館 p.479

⑤ ローカス・オブ・コントロール

ローカス・オブ・コントロール (LOC) は、行動の結果を自分の統制によるものと捉えるか、外的要因によるものと捉えるかを示す概念で、ロッターが提唱した。結果を努力や能力など自分の内的要因に帰属する傾向を内的統制型、運や他者など外的要因に帰属する傾向を外的統制型と呼ぶ。内的統制型は主体的行動や問題解決に結びつきやすいとされるが、状況によっては過度な自己責任感を生むこともある。個人の動機づけやストレス反応を理解する上で重要な概念である。

参考

Rotter, J. B. (1966)

Generalized Expectancies for Internal versus External Control of Reinforcement.

Psychological Monographs, 80(1), Whole No. 609.

池澤 徹也 (2015) 心理学検定 基本キーワード [改訂版] 日本心理学諸学会連合 心理学検定局 p.157

⑥ ホスピタリズム

ホスピタリズムとは、乳幼児が長期間にわたり施設収容や入院などで母親的養育者との情緒的接触を欠くことにより生じる発達障害を指す概念で、スピッツが報告した。情緒的剥奪により、無表情、発達遅滞、食欲低下、対人反応の乏しさなどがみられる。特に生後1年以内の長期分離は影響が大きいとされる。後の愛着理論の発展にも影響を与え、乳幼児期の安定した養育環境の重要性を示す代表的な知見である。

参考

下中直人 (2003) 心理学事典 平凡社 pp.763-764

⑦ 動機付け衛生理論

動機付け衛生理論は、ハーズバーグが提唱した職務満足に関する理論で、職務要因を「動機付け要因」と「衛生要因」の二つに区別する。達成、承認、責任、成長などの動機付け要因は満足を高め、内発的動機づけを促す。一方、給与、職場環境、上司との関係などの衛生要因は、不十分な場合に不満を生むが、整えても満足を高めるわけではないとされる。職務設計や組織改善において重要な視点を提供する理論である。

参考

下中直人 (2003) 心理学事典 平凡社 p.296

⑧ 社会的手抜き

社会的手抜きとは、集団で課題に取り組む際、個人の貢献が他者に埋もれることで努力量が低下する現象を指し、ラタネらが実証した。個人作業よりも集団作業の方がパフォーマンスが下がることがあり、責任の拡散、評価の不明確さ、他者への依存などが要因とされる。特に人数が増えるほど手抜きが生じやすい。対策として、個人の貢献を可視化することや、課題の意味づけを高めることが有効とされ、組織心理学や社会心理学で重要な概念である。

参考

池澤 徹也 (2015) 心理学検定 基本キーワード [改訂版] 日本心理学諸学会連合 心理

⑨ バイオフィードバック

バイオフィードバックとは、心拍、筋電、皮膚温、呼吸などの生理反応を機器で測定し、その情報を視覚・聴覚的に本人へフィードバックすることで、生理反応の自己調整を学習する方法である。自律神経系の反応を意識化し、リラクゼーションやストレス軽減、疼痛管理などに応用される。特に筋緊張性頭痛や不安症、過敏性腸症候群などで有効性が報告されている。行動療法の一技法として位置づけられ、セルフコントロール能力の向上を目的とする。

参考

下中直人 (2003) 心理学事典 平凡社 p.679

⑩ 洞察学習

洞察学習とは、試行錯誤を繰り返すのではなく、問題の構造を全体的に把握し、要素間の関係に気づくことで、突然解決に到達する学習を指す。ゲシュタルト心理学のケーラーがチンパンジーの実験で示した概念で、棒や箱を組み合わせて餌を取る行動が、偶然ではなく「関係の再構成」によって生じると説明した。洞察は「アハ体験」とも呼ばれ、創造的問題解決や認知的柔軟性を理解する上で重要な理論である。

参考

池澤 徹也 (2015) 心理学検定 基本キーワード [改訂版] 日本心理学諸学会連合 心理学検定局 p.45

⑪ マガーク効果

マガーク効果とは、視覚情報と聴覚情報が矛盾する際に、両者が統合されて実際とは異なる音として知覚される現象である。例えば、音声は「ba」でも、口の動きが「ga」に見えると「da」と知覚されることがある。マガークとマクドナルドが 1976 年に報告した。人間の言語知覚が単なる聴覚処理ではなく、視覚との統合 (マルチモーダル知覚) によって成り立つことを示す代表的な現象であり、コミュニケーション研究や発達心理学でも重要視される。

参考

池澤 徹也 (2015) 心理学検定 基本キーワード [改訂版] 日本心理学諸学会連合 心理

⑫ 疑似相関

疑似相関とは、実際には因果関係や直接的関連がないにもかかわらず、偶然の一致や第三の要因の影響によって、二つの変数の間に関連があるように見える現象を指す。例えば、ある地域でアイスクリーム販売量と溺水事故が同時に増えても、両者の背後に「気温の上昇」という第三の要因が存在する場合がある。疑似相関は誤った因果推論を生みやすく、研究や日常判断において注意が必要である。統計的統制や実験的検証が重要となる。

参考

野島 一彦・繁柁 算男 (2019) 公認心理師の基礎と実践⑤ 心理学統計法 遠見書房
p.53

●出題意図・解答例

■令和 8 年度 仁愛大学大学院 入学試験問題（二次募集）

【心理学】Ⅰ

【出題意図】

近年の臨床心理学において重要な概念・トピックに関して、十分な知識および論述する能力があるかを問う問題である。

問 1

評価の基準

- (1)各段階の用語を記述できているか
- (2)各段階の心理社会的危機と発達課題ともに説明できているか
- (3)誤字脱字がある場合や各段階の主要な用語が記述されていない場合は減点する

問 2

評価の基準

- (1) 主題理解と論理の明確さ：DSM と ICD の違いを的確に捉えているか
- (2) 論理的構成と段落展開：論理的に展開され、導入・展開・結論が明確か
- (3) 専門的知識の活用：公認心理師の役割・倫理的配慮・法制度への言及があるか
- (4) 具体例・実践的視点の活用：ケース・フォーミュレーション・ラベリング・スティグマ・医師の指示など実践的対応が具体的に示されているか
- (5) 表現力・文章の完成度：論述内容全体について、表現の適切さ、論の整合性があるか

【心理学】Ⅱ

【出題意図】

心理学に関連する広範な領域から、重要かつ基本的な用語の知識があるかを問う問題である。

- ① オズグッド (C.E.Osgood)

オズグッド (C. E. Osgood) は、言語の意味構造を数量的に捉える研究を進めたアメリカの心理学者で、特にセマンティック・ディファレンシャル法 (SD 法) の開発で知られる。SD 法は、両極の形容詞対を用いて概念の意味的印象を評定させ、その結果から評価性・力量性・活動性の三因子を抽出する手法である。オズグッドはこの方法を通じて、文化や言語を超えて共通する意味次元の存在を示し、意味研究・社会心理学・コミュニケーション研究に大きな影響を与えた。

参考

梅津 八三ほか (2003) 心理学事典 平凡社 p.29

② アサーション・トレーニング

アサーション・トレーニングとは、自分の感情や要求を相手の権利を尊重しつつ、率直かつ適切に表現するコミュニケーション技能を育てる訓練である。攻撃的でも受動的でもない「自己主張的 (アサーティブ) な表現」を目指し、I メッセージの使用、相手の立場の理解、非言語表現の調整などを学ぶ。対人関係の改善、ストレス軽減、職場や医療・教育現場での円滑なコミュニケーションに有効とされ、行動療法や社会技能訓練の一技法として位置づけられる。

参考

一般社団法人 日本心理臨床学会 (2011) 心理臨床学事典 丸善出版株式会社 p.465

③ 社交不安症

社交不安症とは、他者から否定的に評価されることへの強い恐れにより、人前での会話・発表・食事などの社会的状況を著しく回避または苦痛を伴って耐える状態を指す。不安は過度で持続的であり、動悸・震え・赤面などの身体症状を伴うことも多い。日常生活や学業・職業機能に支障をきたす点が特徴である。認知行動療法では、否定的な自己評価の修正や段階的曝露が有効とされ、薬物療法が併用されることもある。

参考

宮下保司 (監修) (2022) カンデル神経科学 第2版 メディカル・サイエンス・インターナショナル p.1528

④ インフォームド・コンセント

インフォームド・コンセントとは、医療者が患者に対して、病状、治療法の内容・効果・

リスク、代替案などの情報を十分に説明し、患者が理解したうえで自発的に同意するプロセスを指す。患者の自己決定権を尊重する医療倫理の基本原則であり、説明義務と同意取得の双方が重要である。単なる署名ではなく、双方向的なコミュニケーションを通じて意思決定を支援する点に特徴がある。医療、臨床心理、福祉領域で必須の概念である。

参考

一般社団法人 日本心理臨床学会 (2011) 心理臨床学事典 丸善出版株式会社 p.129

⑤ エゴグラム

エゴグラムとは、交流分析 (TA) に基づき、自我状態の強弱をグラフ化して個人の性格傾向を把握する方法である。自我状態は、批判的親 (CP)、養育的親 (NP)、大人 (A)、自由な子ども (FC)、順応した子ども (AC) の 5 つから構成され、質問紙への回答を得点化して棒グラフとして示す。エゴグラムは、対人関係の特徴やストレス反応の傾向を理解する手がかりとなり、カウンセリングや自己理解、組織内研修などで広く活用されている。

参考

氏原 寛ほか (2012) 心理臨床大辞典 培風館 pp.381-384

⑥ ピアジェの保存の概念

ピアジェの保存の概念とは、物の見かけが変化しても、量・数・長さなどの本質的性質は変わらないと理解する能力を指す。前操作期の子どもは、コップの形が変わると水の量も変わったと判断するなど、外見に左右されやすい。具体的操作期になると、可逆的思考が発達し、数・量・体積・重量などの保存が可能になる。保存概念の獲得は、認知発達の段階的変化を示す重要な指標とされ、思考の論理性の発達を理解する上で中心的な概念である。

参考

氏原 寛ほか (2012) 心理臨床大辞典 培風館 p.106

⑦ ワーク・ライフ・バランス

ワーク・ライフ・バランスとは、仕事と私生活の双方を調和させ、働きながら健康・家庭・自己成長などの生活領域を充実させることを目指す考え方である。長時間労働の是正や柔軟な働き方の導入により、仕事の質と生活の質をともに高める点が重視される。個人にとってはストレス軽減や生活満足度の向上につながり、組織にとっても生産性向上や離職防止

に寄与する。現代の労働政策や人事管理における重要な概念である。

参考

仕事と生活の調和とは（定義） - 「仕事と生活の調和」推進サイト - 内閣府男女共同参画局

https://www.cao.go.jp/wlb/towa/definition.html?utm_source=copilot.com (2026/4/30 最終確認)

⑧ 8050 問題

8050 問題とは、80 代の親が 50 代の子どもの生活を支え続ける状況を指し、主に長期のひきこもりや就労困難を背景として生じる社会問題である。親の高齢化により、介護・生活費・医療などの負担が増大し、親子双方が孤立や貧困に陥るリスクが高まる点が特徴である。家族のみでの対応には限界があり、地域支援、福祉制度、就労支援、医療・心理的支援の連携が求められる。少子高齢化が進む日本において、深刻化が懸念される課題である。

参考

～地域包括支援センターにおける「8050」事例への対応に関する調査～ 報告書 厚生労働省 (2026/4/30 最終確認)

<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000525388.pdf>

⑨ α 波と β 波

脳波のうち α 波は、8～13Hz の比較的ゆっくりした波で、安静時や閉眼時に優勢となり、心身がリラックスした状態を反映する。一方、 β 波は 13～30Hz の速い波で、注意集中、問題解決、思考活動などの際に増加する。 α 波の減少や β 波の増加は覚醒水準の上昇を示し、課題遂行やストレス反応の指標として用いられる。これらの脳波は、心理生理学において覚醒度や情動状態を評価する重要な生理指標である。

参考

梅津 八三ほか (2003) 心理学事典 平凡社 p.671

⑩ 言語隠蔽効果

言語隠蔽効果とは、言語情報が他の感覚情報の知覚を妨げたり、弱めたりする現象を指す。特に聴覚場面で、言語として意味をもつ音声が表示されると、非言語的な音の特徴（高さ・

強さ・リズムなど)の知覚が阻害されることが知られている。これは、言語処理が認知資源を多く占有するため、音響的特徴への注意が低下することが要因とされる。音声知覚研究や聴覚心理学において、言語処理と低次知覚処理の相互作用を示す重要な概念である。

参考

大山 正ほか (2007) 新編 感覚・知覚心理学ハンドブック Part2 誠信書房 pp.506-507

⑪ 注意制御

注意制御とは、状況に応じて注意の向け先を選択・維持・切り替える能力を指し、認知機能の中核となる実行機能の一部である。不要な情報を抑制し、課題に関連する刺激へ注意を集中させる「選択的注意」、複数の情報源を扱う「分配的注意」、注意の焦点を柔軟に切り替える「転換」が含まれる。注意制御は学習・問題解決・感情調整に重要であり、発達障害や不安症では困難がみられることがある。心理学・神経科学で広く研究される概念である。

参考

大山 正ほか (2007) 新編 感覚・知覚心理学ハンドブック Part2 誠信書房 pp.77-81

⑫ 主効果と交互作用

主効果とは、実験計画法において、ある独立変数が従属変数に及ぼす平均的な効果を指し、他の要因の水準に関係なく一貫してみられる影響をいう。一方、交互作用とは、一つの独立変数の効果が、別の独立変数の水準によって変化する現象である。つまり、要因 A の効果が要因 B の条件によって異なる場合に交互作用が生じる。交互作用が有意な場合、主効果の単純解釈は適切でなく、要因間の組み合わせごとの単純主効果を検討する必要がある。

参考

中島 義明ほか (2005) 心理学事典 有斐閣 pp.245-246,395